

コノハナノサクヤビメ

## 木花之佐久夜毘売

浜崎 淑子

あの方と出会ったのは、通勤列車の中だった。サラリーマンの様なのだが着ている服はだらしなく形が崩れ、ポケットには何が入っているのだろうか、パンパンに膨れていた。その所為か着ている物が背広である事すら忘れてしまっそうになる。まさに中年男のガタガタにくたびれた成れの果て、と言ってしまってはいささか失礼にはなるが、流離い人の様相を呈していた。ところが、そんなあの方と過ごした時間は特別なものだったし、風のように小夜子の中を通り過ぎて行っったものが有った。それは、小夜子には思いもしない事だった。列車と言う箱の中の出来事ではあるが、小夜子の中を確かに通り過ぎたものが有った。それは『木花之佐久夜毘売』と言う天より舞い降りた桜の精と共に……。

出発のベルを追い掛ける様に飛び乗った、あの時が事の始まりだった。八時二十五分発、折尾行きの普通がいつも利用している列車の時刻だ。その日は、朝から手がけていた仕事がいっつもより三十分ばかり遅かった事も有り、列車には小走りの末やっとなに合っったのだ。そうして、列車のドアが閉まる隙間を滑る様に乗り込んで来たのがあの方だった。

息衝く小夜子はドアの近くの座席に直ぐ様腰を下ろした。あの方は小夜子の向かい側に腰を掛けた。あの方も小夜子程ではないにしても、苦しそうな息遣いから駆けて来た事は察しがつく。土曜という事も有り比較的乗客は少なく、それでも二人を乗せた列車は出発の合図と同時にトンネルの様な夜へと走り出した。

あの方は列車が動き出すとゆっくり目を閉じた。一日の疲れから来るものなのか、それとも何か考え事でもしているのでもろうか。時折鼻から強く息を押し出し、両腕を組んだまま、体の軸だけは固定された様に列車に揺られていた。車内にはあの方の他に、学生風の男女が二人携帯電話でメールを送っていた。互いはその場にはない相手に送信をしていた。それから、単行本を読んでいる年配の女性とOLと思われる女性が乗り合わせていた。列車の中では一応に皆が沈黙を守り、天井の下の吊り環が規則正しい動きを続けていた。重い空気の間を照らす蛍光灯の明かりが侘びしさを募らせた。

小夜子はある方の顔をぼんやりと眺めた。三角の太い眉、大きな口と鼻、年齢は六十過ぎ。髪の毛は全体の雰囲気と反する様に短く角刈りにされていた。この角刈りは着こなし

の難しい衣服の様なもので、強面だと益々凄みが出るし、優男だと何処か頼りない甘さが付いて来る。この方の場合……。

突然、小夜子の視界に大きな二つの眼が飛び込んで来た。眼は小夜子の瞳の中で微動だにしないまま、小夜子に強い眼差しを向けていた。小夜子のはっとした。目の前のあの方の存在を忘れていた訳ではないが、小夜子は自分の前に座っているあの方を、いつの間にか小夜子の視界に留めていたのだった。

小夜子は思わず視線を列車の床に逸らした。コトンコトンと列車の揺れる音が閑寂な夜に響いた。あの方の方を向いた時、その視線が何処に有るのが気になった。小夜子は上目遣いであの方の目の所在地をそつと確認した。しかしそこで待っていたものは、不動明王の様に見開いた二つの眼だった。小夜子は一瞬どきりとした。心臓の鼓動が昂ぶるのが分かった。しかし、小夜子は自分の動揺を隠すかの様にゆっくりと頭を垂れた。その後はその行動のつじつま合わせにも思える、膝の上に置かれた鞆の持ち手の部分を何度となく指先で撫でた。

そうしながらも、小夜子は数日前に寺の門前を通り掛かった時の事を思い出していた。桜の枝が通りの方に迄伸びていて、行き交う人においてをしておいた。小夜子は立ち止まり中の様子を窺った。そこには、静かな昼下がりの境内に咲き誇る桜の姿があった。暫く眺めていた小夜子が中に入ろうとした時だった。ジャランジャランと金属が激しくぶつかる音が近づいてきた。片手に剣、反対の手に靱索を持った不動明王が立ちほだかり、中に入ろうとする小夜子を気迫で以て押し返そうとした。

不動明王は言った。

「何をしに来た。」

小夜子は恐る恐る答えた。

「桜の枝を伝って参りました。怪しい者では有りません。あまりにも見事に咲いていましたので、暫く眺めさせて頂けないでしょうか。」

たじろぐ小夜子を睨み付けながら不動明王は、

「良からう。」

そう言つて、くると背を向け境内の奥に消えて行つた。すると、小夜子の目の前に咲く桜の花びらがひらひらと舞い降りて来た。小夜子は手の平でそれを受け止めた。目には見えない何かを包み込んだまま、今にも溶けてしまいそうな花びらの淡い感触を小夜子は感じた。やがて、後から後から花びらが舞い降りて来た。その花びらの一枚一枚からは言葉が風の波になり、さらさら、さらさらと聞こえて来た。明るい光の中の神聖な場所に小夜子はいた。鈴の様な微かな音色が柔らかい光の中に綻びて行つた。

あの時の事を思い浮かべていた小夜子の表情からは独りずに笑みが溢れた。あの方もおそらく、そんな小夜子を眺めていたのだろう。小夜子に合わせるかの様に目を細めていた。

これがあの方と小夜子の最初の挨拶だった。

それからは、我に返った小夜子の方から話し掛けた。

「お花見に行かれましたか。」

「行きました。と言っても住まいが公園に隣接していますから、今は毎日楽しんでますよ。」

「それは宜しいですね。」

「今年は例年に無く、長く咲き続けています。あつという間に散ってしまう桜では無い様です。」

「気が付きませんでした。」

「という事は、今年は豊作か……。」

「そうなのですか。桜と豊作と関係があるのですか？ 自然環境の変化も要因として考えられますよね。」

「それもあるかも知れませんが……。いずれにせよ桜は特別な思いを懐かせてくれます。

『願わくは花の下にて春死なむこの如月の望月のころ』この場合、花は桜を指します。」

あの方は胸の前で腕を組み、言い聞かせる様に言った。

「良くご存知ですね。西行の歌ですね。」

「咲いても散っても美しい。」

そう言いながら、あの方は小夜子の隣に席を移動した。

小夜子の方も見知らぬ人に拘わらず特別な警戒心を抱く事がなかったのは、あのパンパンに膨れ上がったポケットの所為かも知れなかった。小夜子は話しを続けた。

「私個人的な事なのですが、桜を眺めていますと尾崎豊さんを思い出します。」

「ほう……。尾崎豊ですか。」

どうして初対面のあの方にこの様な話しを始めたのか、小夜子自身にも理解できなかった。

「尾崎さんの歌声は激しいリズムで有りながら、何処か切ない美しさを秘めている様に感じます。それはガラス細工の様に繊細で、強く握り締めると粉々に砕けてしまいそう……。しかもあまりにも純粹過ぎて、彼がおじさんになって歌う姿がどうしても想像出来ないのです。途中で空中分解するしか……。桜と重ね合わせてしまいます。」

「つまり私はむさ苦しいおじさんですか。」

「そういうつもりで言ったのでは有りません。私もおばさんですから。小学校の頃、脱脂粉乳飲まれました？」

「脱脂粉乳？ 飲みましたね。」

「団塊の世代。」

「そうです。」

「この頃、私には見えるのです。貴男には見えませんか？」

「見える？ 何がですか？」

「若い頃には見えなかったものが見えるのです。おばさんになる迄生きたからかも知れませんが……。」

「そう言う事ですか。貴女の経験が視野を広げたと言う事ですか。」

「ちよつと違います。」

小夜子は先程から気になっていたあの方のポケットを一瞥した。すると、あの方は自分のポケットを叩きながら、まるでクイズの質問をするかの様に問い掛けた。

「このポケットに何が入っているのか、見えますか？」

「いえ、残念ながら見えません。」

小夜子は軽く笑いながら答えた。

「何が入っているのですか？」

「気になりますか？」

「ええ。」

するとあの方はポケットの中のものの一つ一つ取り出し始めた。

「まずは、手帳。それからペン。これは紙ナプキン。」

「何か書いてありますね。」

「思いついた事を走り書きにしています。これはこの列車に乗る少し前に、桜を眺めている際に書き留めておいたものです。」

「それで滑り込みセーフだったんですね。」

「ご覧になっていましたか……。」

それからあの方は、スティック状の砂糖とフレッシュミルクも取り出した。

「ああ。これは昼間コーヒーを飲んだ時、使わなかったので貰って来ました。」

「成る程。色々な物が入っていたんですね。もう片方のポケットには何が入っているのですか？ そちらの方は何か重い物の様ですが……。」

「こちら……。」

あの方はポケットの中から今度はビニール袋を取り出した。

「カメラの望遠レンズです。これ前から探していたのです。」

「カメラも随分お持ちでしょうね。」

「有りますね。」

あの方はまるで宝物を見せるかの様に、レンズをビニール袋から取り出した。

「これはミノルタの望遠レンズです。」

「アンティック……。」

「数十年前のもんです。」

「へえ……。」

「いいでしょう。」

そう言いながら、あの方はレンズを片眼に近づけてレンズ越しに車内を覗いた。

「何か見えますか？」

「……。」

「そのレンズ、覗いてもいいですか？」

「どうぞ。」

あの方はここにこししながら、レンズを小夜子に手渡した。今度は受け取ったレンズを小夜子が覗いた。

「何が見えます？」

あの方が訊ねた。

「何も見えません。」

「レンズを目から離して見て下さい。」

小夜子は言われた通り、レンズを離してまた覗いた。

「逆さまに映っています。地に足が着いていない中途半端な感覚が写真のネガの様に流れています。」

最近、小夜子はどうする事も出来ない大きな力に向かい合い、少しずつ後ずさりしている自分の姿が見えていた。その所為かいつも空中を歩いている様な錯覚を覚える。今、まさにそれに近いものを感じていた。

列車は夜の駅を無言のまま通り過ぎて行った。

「あの……。信じて貰えないかも知れませんが、先日不思議な経験をしたのです。」

「ほう、差し支えなければ話して下さい。」

とあの方は言った。

小夜子はあの方が興味本意ではなく、小夜子の話しを真面目に聞こうとする姿勢を感じた。

「私が寺の境内で桜を眺めていましたら、何処からかジャランジャランという金属音と共に不動明王が現れました。不動明王は『何をしに来た』と問い質したので、『桜の花を見に参りました』と答えました。すると『良かろう』そう言って、くると反対を向き境内の奥に消えてしまいました。その後、桜の花びらが舞い降りて来たのです。私はそれを手の平で受け止めました。その時ですが、姿は見えないのですが優しい何かに包まれた様な気がしたので。」

あの方は目を閉じ、

「そうですか。それはもしかして『木花之佐久夜毘売』（コノハナノサクヤビメ）が貴女の所に舞い降りて来たのではありませんか。」

そう言った。

「コノハナノサクヤビメ……。」

「ご存知ありませんか？」

「どなたですか？」

「神話の世界ですが、日向の高千穂に降り立った日子番能邇邇芸命（ヒコホノニニギノミ

コト)が『笠沙の岬』で美しいコノハナノサクヤビメに出会い、一目惚れをする所からこの話は始まります。ニニギノミコトはコノハナノサクヤビメが大山津見神(オオヤマツミノカミ)の娘だと言う事を知り、早速ニニギノミコトは父オオヤマツミノカミにコノハナノサクヤビメとの結婚を申し出る。すると、オオヤマツミノカミはコノハナノサクヤビメと姉の石長比売(イワナガヒメ)を献上品と共に差し出した。

「姉も一緒に？」

「当時は姉妹婚という風習があつた様です。」

「そうなの……。」

「ところが、サクヤビメだけを娶り、姉の方は返されてしまう。」

「それから。」

「父、オオヤマツミノカミはそれを知り、『イワナガヒメを娶れば、天つ神の御子の命は、雪降り風吹くとも岩の様に永久に堅固であり、サクヤビメを娶れば、花の様に栄えるであろう。サクヤビメを娶り、イワナガヒメを返すならば、天つ神の御子の命は花の様にはかないものになる。』』と言った。つまり、命は永遠のものでなくなると言ったのだな。」

「ところで、ニニギノミコトはどなたなの？」

「天照大御神の御子、天忍穗耳命(アメノオシホミミノミコト)と万幡豊秋津師比売命(ヨロズハタトヨアキツシヒメノミコト)との間に生まれた子供で、天照大御神の孫になるかな。天照大御神が天孫降臨を命じたのがニニギノミコトなんだ。」

「神秘的なお話ですね。」

「咲いては散る。散つては咲く。桜は人の歴史を繰り返し見続けて来たという事ですね。」

「貴女の所にもコノハナノサクヤビメが来られましたか……。」

「そう言いながら、あの方は自分のネクタイでもって先程から撫でていたレンズの側面を磨き始めた。」

「ネクタイってそんな風に使うと、結構便利な物ですね。肝心のレンズは磨かないのですか？」

「レンズは傷が付きますからね。」

「そうですね。ところで、貴女の所にも……。確か、そうおっしゃいましたが、コノハナノサクヤビメが貴女の所にも来られたのですか？」

「いえ、私の所にはまだです。」

「では何処に……。」

「私の所の所です。」

「貴男のお姉様の所ですか……。聞かせて下さい。」

「私の姉が先日、亡くなりました。」

「そういうお話ですか。」

「貴女にはどういう内容かお分かりですか？」

「いいえ……。」

「じゃあ、話を続けます。その日は朝方から天気も良く、姉は庭いじりをしていたそうです。娘が見た、それが最後の姿でした。昼過ぎ、庭に横たわっている姉を見付けた時は、既に息を引き取っていたそうです。庭には一本の桜の木があった。姉から『今年はこちらの桜を見に来なさいよ』と誘われていたのだが、皮肉な事に姉が居なくなつてからの事になつてしまった。姉はその桜の木の下で眠る様に……。安らかな表情だった。」

「お姉様の所にもサクヤビメが……。」

「そう思います。姉の体の上には桜の花びらが散っていたそうです。」

「お姉様は幸せだったのでしょうかね。」

「多分。嫁ぎ先が商いをしていまして、お金の面では随分苦勞をしている様でした。姉がよく自分の持ち物をお金に換えていましたよ。『そんな風じゃあ、何も無いだろう』と私が言うと、姉は『桜の花が毎年咲き、それを眺める事が出来ればいい』と笑いながら答えていたのを思い出しました。もしかしたら、此方の想像以上に厳しい状況だったのかも知れません。その時は特別気にも留めていませんでしたので、今にして思えばあれは姉の本音だったのだと、改めてあの時の言葉が心に響いて来ますよ。そうですね……。幸せだったと思います。子供達も皆独立し、あの日も姉は店の手伝いをしたそうです。一年中忙しい日々を送っていましたから、生涯労働者だったと思います。手を抜かない人間でした。そんな姉の唯一の楽しみが庭いじりでしたから。しかも桜の木は姉の自慢でもあった。あの日の姉に桜がどの様に映つたのだろうか……。」

「もしかして、桜の咲く頃に私の事を思い出して下さい、という願いが秘められていたのではありませんか？ そんな気がしません。」

「そうかも知れません……。」

小夜子はあの方の話を聞きながら、ニニギノミコトとサクヤビメの神秘的な世界を想像した。

それは……。

朝靄の中、桜の木の下でサクヤビメが種を蒔いていた。その様子をニニギノミコトは木陰より窺っている。サクヤビメの額の汗が頬伝いに手の甲にぼたりぼたりと落ちていた。

ニニギノミコトが笠沙の岬でサクヤビメを見初めたのは先日の出来事だった。その時のサクヤビメは岬に立ち、海を眺めていた。そこを通りかかったニニギノミコトは華奢な後ろ姿のサクヤビメに声を掛けた。振り返ったサクヤビメを見たニニギノミコトは暫し立ち尽くし、それからゆっくりと歩み寄りサクヤビメに名を訊ねた。しかし、サクヤビメは首を振りその場を立ち去ろうとした。呼び止めるニニギノミコトにサクヤビメが訊ねた。

「貴男様は何処よりお見えになられた御方で御座いましょう。」

するとニニギノミコトは空を見上げ、そして両手を広げた。その指先は天空を指し、それへの畏敬の念を感じさせた。宙に全てを任せた様に悠然と構え、それでいて迸る様な情熱を秘めた高邁な雄々しき姿があった。ニニギノミコトにすっかり見とれてしまったサク

ヤビメは、いつの間にかニニギノミコトへの憧憬の中に居た。

今度はニニギノミコトが訊ねた。

「貴女様は先程、何を眺めておられたのですか？」

サクヤビメは答えた。

「海です。波頭に降り注ぐ光が今日は余りにも眩しく輝いていますので、見入っております。見入っております。」

銀色の魚が海面で戯れているかの様に、きらきら光る海を見ながら、

「おお、なんと……。」

ニニギノミコトは感嘆の声を上げ、それから呟いた。

「海が何か囁いている。」

「ええ、海の彼方から聞こえますでしょう……。」

「聞こえる。確かに聞こえて来る。この海の彼方に何かあるのですか？」

「はい。海の彼方には常世の国が御座います。」

「常世の国……。」

「はい。常世の国に御座います。貴男様にはそれが見えますか？」

サクヤビメは海を指さし言った。

「私には見えませんが、常世の国とはどのような国でありましようや。」

サクヤビメは嬉しそうに答えた。

「常世の国とは、それは美しい所に御座います。泉より湧き出ます水は途切れる事無くさらさらと流れ、その水音は聞く者の心を幸せに致します。そうして、果てしなく広がる田には瑞々しい稲の穂が緑風に揺れ、人々は豊かな実りを待つ平和な日々を送っております。」

「其処が常世の国と申されますか。」

「はい。そうで御座います。常世の国は私の中にも御座います。」

「貴女様の中に……。」

サクヤビメは深く頷いた。

「ところで、先程天空を仰ぎ見られましたが、貴男様が来られた所とはどのような所に御座います。」

「其処は……。白い霞に包まれた所です。」

「白い霞……。其処では貴男様のお姿を見る事は出来ませうでしょうか？」

「出来るかもしれませんが、出来ないかもしれません。」

「……。」

「姿など無くてよいのです。」

「……。」

「時に、彩色が織り成す霞が幾重にも重なり、それは美しい所です。」

「夢の様なお話ですね。」



「貴女様が先程話された『常世の国』も夢の様です。」

「そうでしよう。でも、霞に包まれた美しい所も一度伺いたいものです。」

「お連れ致しますよう。」

「私をですか……。」

「ええ、貴女様をです。」

「では、いずれ……。お連れ下さい。」

「必ず……。」

「まあ、すっかり忘れておりました。私は機織りに戻らなければなりません……。」

ニニギノミコトは立ち去ろうとするサクヤビメに訊ねた。

「また、お会い出来るでしょうか？」

サクヤビメは黙ったままにつこり微笑んだ。そうして、ニニギノミコトはサクヤビメの衣が波の様に揺れる後ろ姿を暫し眺めていた。そんなサクヤビメとの出会いが記憶に新しい。

ニニギノミコトが我に返ると、サクヤビメは種を蒔き終え靄の奥へと歩いて行った。ニニギノミコトがサクヤビメの後を追いつつ、靄の中へ入ろうとした時だった。目の前に鬼が現れた。鬼はニニギノミコトの前に立ちはだかり、言った。

「何しに来た。」

ニニギノミコトは答えた。

「桜の花を見に参りました。」

すると、鬼はニニギノミコトをじろりと睨み付け、

「良からう。」

と言った後、くるりと背を向け靄の中へ消えて行った。

ニニギノミコトが気づいた時は、一人桜樹の下に立っていた。頭上を見上げると、陽光が桜の花びらをきらきらと揺すり、その背後には青い空が広がっていた。何処からともなく吹く淡い優しい風が、ニニギノミコトの中を通り過ぎて行った。

列車が駅に止まり、小夜子の体は進行方向に傾いた後、すぐに逆方向にひき戻された。隣の席のあの方も同じ様に左右に揺れていた。

「何かお考えでしたか？」

「どうして、そう思われます。」

「ずっと、前の座席を眺めていましたから……。」

「ニニギノミコトとサクヤビメの事を考えていました。」

「そうですか。」

あの方は含み笑いをしながら言った。

「ところで、望遠レンズはきれいに磨かれましたか？」

小夜子が訊ねた。

「磨き終わるといふ事はありませんから。」

「そうですね。貴男の所にはサクヤビメはいつ来られるのでしょうかねえ。」

「まだ随分先の事でしょう。」

「なぜそう思われますか。」

「私が桜の花を本当に見たのは姉の所だった様に思います。」

「と言いますと……。」

「今迄咲いているのは知っていましたが、見てなかったのです。」

「どうして……ですか。」

「私は仕事人間でしたから……。あの日、姉が息を引き取った場所に立ち、桜の木を見上げた。本当に美しいと感じました。」

「でも、花見に行かれたかお聞きした際に、お住まいが公園の傍と言われましたでしょう。それでも……。」

「確かに。でも私の目に映っていたものは、『春』と言う漠然とした風景でしかなかったのです。頭の中が仕事で一杯だった……。」

「そうですね。私達おじさんやおばさんの時代って、まるで蒸気機関車の様に石炭をどんどん燃やし、もくもくと煙を吐きながら走り続けて来た。高度成長期の右肩上がりの時代から現在迄。今にして思えばいい時代だったかも知れませんが、とうとう人生の八合目も過ぎたかな、と考えますよね。」

「考えますか。」

「若い時には見えなかったものが見えて来る。」

あの方は左手でレンズを持ち、右手でカメラのシャッターを切る真似をした。

「いい写真撮れましたか？」

「撮ろうと考えています。」

「でもなかなか手付きが宜しいじゃありませんか。」

「実は、専攻が写真学科だったんです。」

「それで……。」

「今日は仕事が決まりましたね。数ヶ月前から無職でしたから。今流行のリストラですよ。フリーになった時、ぽっかり穴が開いた様になりましたよ。そんな時、手にしたのがカメラでした。卒業後に就いた仕事はカメラとは無縁の職場でしたので、いつの間にかカメラは押し入れの奥に追いやっていました。」

「でもいいお話ではありませんか。お仕事も決まり、それは良かったですね。今日は大安です。」

「そんな事気にするのですか。」

「私は気にします。ところで先程のお話の続きですが……。私は素人ですから良くは分かりませんが、それでも自分の気持ちの中でカメラのシャッターを切る事が有ります。いつも見慣れた空や町並みがある瞬間に違ったものに見えて来る。それは扉を開けた時に入っ

て来る風の様なものです。澄んだ清らか風も有れば、もの悲しい風も有ります。私は海に見える高台に住んでいますので、朝陽も夕陽も二階の窓から、時には物干し場から眺めます。朝には銀白色の太陽がまるで呼吸をしているかの様に脈打ちながら、東の空より昇って来る。そして夕暮れ時に西の空に沈む太陽が雲の谷間に入る時、一番明るい光を放ちながら吸い込まれる様に夜の世界に帰って行く。私は、思わずパノラマの風景を撮る。ちょっとロマンティックでしょう。」

「それはいい写真が出来そうだ。」

「特に我が家の二階の窓越しから見る夕陽は、目の前に広がる家々のささやかな幸せを照らしている。」

「成る程。」

緋色の雲の襞の中に光りの雨が降り注ぐ時、辺りは夜のとばりに包まれ始める。小夜子は夕暮れ時の空を思い浮かべながら列車の窓を眺めた。

「話しは変わりますが、この頃同じ夢を見るのです。」

「今度は夢ですか。」

「貴男は見られますか？」

「見ませんね。」

「そうですね。」

「どの様な夢ですか？」

「それが白い雲が帯の様に流れていて、その雲の上も下も青い空間が広がっているのです。しかも、その雲の下にはいつも私が居るのが見えるのです。」

「見えるって、貴女は何処にいるのですか？」

「先程レンズ越しに前方の景色を見た様に、此処から私は私を見ているのです。」

「貴女は貴女の姿が見えるのですか？」

「いいえ、肉眼では見えないのですが、私が居るのが分かるのです。」

「……。」

「先程より貴男とお話ししながら、はっと思ったのです。雲の上にはサクヤビメがおられるのではないかと。時に雲の上の世界から下の世界へと降りて来られている様な……。」

「そうかも知れませんか。」

あの方は軽く目を閉じた。

「今、思い出しましたよ。」

「何をです。」

「姉も同じ様な事を言っていたなあ。姉は数ヶ月前に転倒し、意識不明のまま救急車で運ばれた事が有りました。その時は生死を彷徨っていました。」

「そんな事があったのですか。」

「ええ。姉が随分快復した頃、話していました。夢の中で空に白い雲が流れていて、雲の

上には幾つもの階段が有り、姉はその階段を登っても登っても先が見えないって。」

「お姉様が階段を……。」

「貴女ならお分かりになるでしょう。」

「分かります。登っても登っても先が見えないのは私達も同じでしょう。」

「そうですね。」

「人生の八合目も過ぎ九合目も過ぎた頃、眼下に広がる光景はどの様なものだろう。」

「どんなだろうなあ……。ただ、その時々みえる光景がぐっと心に迫って来る、そんな生き方が出来ればいいですね。」

「確かにそうですね。一日が二十四時間、一時間が六十分、一分が六十秒、今は一秒の何分の一かしら……。人生はカメラで捉えた一場面の集合体みたいなものかも知れない。今にぐっと迫って来るもの……。」

「まだまだ時間は有りそうだ。」

「そうですね。ずっと先で、雲の階段の最後の一段を登り終えた時、桜の花びらに包まれて……。その時にコノハナノサクヤビメが語り掛ける様な気がします。だから桜の花に自分の魂を映し出してしまおう。」

「魂……。」

「明日は日曜日ですね。お隣の公園に桜を撮りに行かれますか？ 先程よりカメラもしっかり磨かれておられたでしょう。」

「ははは、そうします。」

列車はコトンコトンと静まり返った夜の街を走り続けた。小夜子は列車に揺られながら、数十年後の自分の姿を思い浮かべてみた。今より髪の毛にも白いものが増え、小夜子の中の細胞はもう動かなかったり消えてしまったりして、小夜子は小さなお婆さんになっていた。そうして、小さなお婆さんになった小夜子はゆっくりと桜の木の方に歩み寄り、満開の桜の花を見上げていた。すると、一枚また一枚と桜の花びらが小夜子の白い髪の毛の上に舞い降りて来た。小夜子は小さなお婆さんになった自分に呼びかけた。お婆さんが小夜子の方を振り返ろうとした時……。

「今度は何をお考えです。」

あの方が小夜子に話し掛けた。

小夜子はくすくすと笑いながら答えた。

「数十年後の私を思い浮かべていました。」

「数十年後ですか……。ところで、貴女はどうなっていましたか？」

「私は小さなお婆さんになっていました。」

「そうですね。」

「お婆さんになった私は桜の花を眺めていました。」

「サクヤビメが舞い降りてきましたか？」

「はい。来られました。」

「やはりそうですか。貴女はどうされました？」

「貴男が声を掛けたので、消えてしまいました。」

「それは、申し訳無い事をしました。」

あの方はちょっと決まり悪そうにしながら、今度は胸のポケットの中から万年筆を取り出し、ネクタイで磨き始めた。

「何でもネクタイで磨くのですね。」

「布地がシルクなので柔らかく、磨き甲斐がありましたね……。」

「その万年筆も磨き終えるという事はないのですか？」

「ははは。ありません。」

「では何処で磨くのを止めるのですか？」

「磨いている中で、一瞬輝く時があります。その時がそうです。」

「一瞬……。」

あの方は万年筆を磨く手を止め、それを背広のポケットに挿した。

「内ポケットに挿す仕草がなかなか様になっていましたよ。それに、そのペンも随分使い込んでいますね。何処のメーカーのものですか？」

「これ、セーラー万年筆です。」

「セーラー。たしかパイロット万年筆もありましたよね。それ、お気に入りでしょう。」

「私が入社した時、買い求めたものです。私に寄り添う様に私の仕事を書き留めてくれました。」

「仕事上の貴男を一番ご存知って事ですね。」

「そうなのです。私の親父もサラリーマンでした。そんな親父の事を思い出す時は、いつも万年筆の事も思い出します。しかも、内ポケットにさりげなく挿していた事を。大人になつたら自分も持とうと、子供心に万年筆への憧れが有りました。」

「持たれた時はどの様なお気持ちでした？」

「そりゃあ、嬉しかったですよ。すべてが希望に充ちていた。」

「そうですね。」

「今はこの万年筆で多くの事を書き過ぎて、少し迷っているかな……。」

「迷う。確かに迷いますよね。」

それからあの方は、思い付いた様に言った。

「取って置きのお話をします。」

「取っ置きのお話。是非聞かせて下さい。」

「では、始めます。」

あの方は秘密の玉手箱を開けるかのような口調で言った。

「毎晩、私は星を眺めながら眠っています。」

「まあ、素敵じゃありませんか。続けて下さい。」

「私の寝室は二階に有り、ベットは丁度出窓の下に設置しています。そこで、私は敢えてカーテンを閉じず、布団の中から窓の向こうの空を眺めながら眠ります。月の明かりも手伝って、夜には星がとても綺麗に輝きます。朝は朝で、鳥達の囀りと共に窓の外が明るくなり、隣の公園から吹く桜の淡い桃色が目覚めを誘います。」

「それから……。」

「夜には、私自身が星や月に導かれ何処か遠い宇宙の彼方へ飛んで行く。そうして、朝には元の布団の中へ帰っている。そんな幻想にも似た行為が何故か一日の始まりを新鮮なものにしてくれる。」

「分かる様な気がします。では、今度は私が取って置きの話しを致しましょう。」

「ほう、話して下さい。」

「先日、展示会の手伝いで鹿児島に行った時の事です。常々より桜島を見たいと思っていましたので、前日に設営も済ませていた事も有り、会場に行く前に隼人港迄車を走らせました。」

「どうでした。」

「その日は天候も良く、桜島が良く見ええました。ただその時の私には、桜島が横たわる象の姿に思えたのです。」

「象ですか……。」

「象です。桜島は象の様に大きくどっしりとしていて、その山肌は象のたるんだ皮膚の壁の様に波打っていました。」

「そうですね。」

「私は次の日も、どうしても桜島を見たくて、象に会う為に隼人港に向かいました。でもその日の桜島は、生憎火山灰に覆われていて、姿を見る事は出来ませんでした。」

「ああ、それは残念でしたね。」

「でも、聞こえて来たのです。」

「聞こえる？何がです。」

「象の心臓の音です。」

「どんな風んです。」

「ドクドクドク……って。それも、しつかりとした力強いものでした。私はじつと目を凝らし、桜島を見詰めました。すると臍気ではありますが、ある光景を見ました。」

「続けて下さい。」

「霞が掛かった様なぼんやりとした中で、横たわる象が何かを吸ったかと思うと、今度はゆつくりと鼻を持ち上げ、そうして空に向けてそれを吹き上げました。噴煙の様に吹き上げられたものは、やがて地上にはらはらと舞い降りて来ました。先程、貴男はその時々に見える光景が心にぐつと迫って来る、とおっしゃいましたよね。正にその時がそうでした。心に迫って来るものを感じました。胸が熱くなりました。」

「そうですか。」

「しかもそれは花吹雪の様に切ない位の美しさを秘めていた。」

あの方は静かに目を閉じた。それからゆっくりと目を開き、小夜子の方を見据えて言った。

「まだまだ、出来そうですね。」

「はい。もう少し頑張れそうですね。」

小夜子は答えた。

「生き抜きましょう。」

小夜子の言葉にあの方は頷いた。

「貴女にこの様な話をするとは……。今夜は不思議な夜だった。」

「私も同じ思いです。あ、聞こえませんか？」

「……。」

「ほら、耳を澄まして下さい。」

「ああ、聞こえる。確かに聞こえますね。」

「今、清らかな風が通り過ぎた様な気がします。」

二人を包む夜気から聞こえて来る鈴に似たさらさらという音色に、あの方と小夜子は静かに耳を傾けた。